

ボランティアと公的機関 自然遊学館わくわくクラブの場合

白木江都子（特定非営利活動法人大阪自然史センター 理事）

自然生態園は、大阪府貝塚市の都市公園「市民の森」にあるビオトープで、「トンボの池」「バッタの原っぱ」「どんぐりの森」「海浜植物エリア」、4つのエリアから成り立っています。今から14年前、貝塚市の施策として「自然生態園づくり」が認められて1つのエリアに50万円ずつ、計200万円の予算がつけました。「自然生態園をつくる会」が結成され、ボランティア延べ2,000人が、機械を使わない、雨水のみで水道水を使わない、貝塚産以外の材料を使わない、池の底にゴムシートを貼らない、の4ない主義を通し、3年かけてつくりました。知名度も実績もない自然遊学館に、貝塚市の予算としては破格の200万円がついたのは異例のことでした。



貝塚市民にさえ存在を知られていない当時の自然遊学館でしたが、友人や自然系の仕事に従事する公務員の方々が、興味を持って駆けつけてくれました。大阪府を始めとする河川関係者、水質部門で公害に関わる技術者、公園関連施設の人々などが、毎週末になると手弁当でやってきて、池を掘り、粘土を貼り付け、空石積み挑戦しました。彼らは、自然生態園をつくる会会長山口進さん（生まれも育ちも貝塚）の山仕事・造園・建築の技術に見惚れ、嵌り、愛弟子気分を楽しんだ様子でした。私は作業を通じて、公務員の方々の顔の広さと連携プレーのスムーズさ、技術の確かさなどを見、仕事の仕方を学び、便宜を図ってもらいました。府営二色の浜公園の工事で処分する海砂を、自然生態園「海浜植物エリア」へ運んで来てもらったりしました。

私は一昨年自然遊学館を退職し、任意団体「自然遊学館わくわくクラブ」の事務局を務めています。わくわくクラブの母体は、この「自然生態園をつくる会」です。ビオトープは完成が全てではなく、つくり続けなければいけないし、維持管理の目標は限りなく貝塚の自然に近づけることだと考えた「自然生態園をつくる会」の人が中心になって、H15年に「自然遊学館わくわくクラブ」と名前を変え、同時に活動の範囲を広げました。

自然遊学館わくわくクラブは、自然生態園作業を中心に据えた「生きもの好き」の集まりなので、生きものごらみの面白いことには、なんでも挑戦します。

和歌山県紀ノ川市桃山町にある児島果樹園ではハッサク作りを手伝って、出荷に難のあるハッサクをいただき、会員やイベントなどに出向いて売り、活動費に当てています。

貝塚市にある小さな池「たわわの小池」の池さらえは、毎年11月23日に実施しています。40年も眠っていた池の底樋が、年1回の池さらえ、泥上げで姿を現し、今年は樋の本来の役目を果たしました。数年前に植えたレンコンの苗は昨夏に開花し、池さらえ時には、小指ほどだけれど、とびきり美味しいレンコンを収穫することができました。

貝塚市の山手「蕎原」の農機具小屋で、ムササビが雨漏り受けの丸い缶に巣作りをしているのが見つかりました。自然遊学館からそのニュースを聞いて、巣になるような大木が少ない環境に同情し、ムササビのアパート作りがスタートしました。府営公園の切り倒された太い材を丸鋸で切っていただき、ノミやチェーンソーで彫って巣箱を作り、農機具小屋に続く大木に掛けてやりました。まだ繁殖は確認されていませんが、遊びには訪れているようです。

貝塚では73種のトンボが確認されていますが、自然生態園トンボの池を訪れたトンボは

23種です。もっと多くの種類のトンボが飛来してくれる環境をつくりたいと願い、泉南のため池を環境調査することにし、専門家に指導してもらうために、助成金を申請することにしました。この面倒な仕事を引き受けてくれたのが、申請の事務仕事に強い公務員Sさんです。仕事帰りの夜遅くに打ち合わせに訪ねてきてくれ、計算と文章作りに精出して助成金審査を突破してくれます。助成金をもらうことで、クラブの目的や活動のあり方を整理する機会を持ち、活動分野が広がり、地味な維持管理活動のマンネリ化が解消されました。任意団体でありながら、予算規模もだんだん大きくなって行き、そろそろNPO法人化も視野に入れなければなりません。ところが、本家の自然遊学館は、予算10%カットが何年も続き、人件費を含めて年間2,100万円ほどになってしまい、事業は縮小せざるを得ません。館の実施する事業に参加する生きもの好きの大人や子どもたちが、ボランティアの存在を知って仲間入りすることが多いので、生きもの好き増殖のために頑張ってもらいたいのに、元気がありません。ボランティアにとって公的機関は、安定のシンボルであり、ボランティア間でいろいろ問題が生じて、その安定性に助けられて、軌道修正し、復活することができます。本家の自然遊学館に元気がなく、ボランティアは助成金のおかげで、自然再生、援農、生きもの調査、里地里山復元などと、走り回っていますが、いずれまたマンネリに陥ります。共倒れにならないよう、小さな博物館がきらきら光る日まではボランティアが踏みこたえないと、と思っています。

生涯学習に力を注いでおられる「ひとはく」では、生きもの好き、研究好き、科学好きの個人や団体に活動の場を与え、そこでそれぞれが目標を定め、その結果を共生のひろばで発表するような仕組みです。発表し、評価されることで伸びて行く人や団体の姿は眩しいほどでした。回を重ね、同じ団体が研究や発表を後輩に引き継ぎ進化させる一方、また新しい顔ぶれも増えていて、共生のひろばが着実に根付いていることに感心しました。裾野の広がりや今ある輪の広がりが今後の課題となり、そろそろ継続の難しさが出てくる頃でしょうが……。

大きい「ひとはく」でも、どこかの小さな博物館のように、元気がなくなるときがあるかもしれません。そんなとき共生のひろばに参加しておられる頼もしい皆さんが、「ひとはく」を放つてはおかない、それが共生だろうなと思ったことでした。